

朱 益鍾 (チュ・イクチョン)

ソウル大において日帝下韓国経済史研究で博士学位を受ける。ハーバード大訪問学者と大韓民国歴史博物館学芸研究室長を経て、現在、李承晩学堂教師として韓国近現代史を研究するかたわら、教育業務を引き受けている。教科書フォーラムの『代案教科書 韓国近現代史』(キパラン、2008年刊)の編纂に加わったほか、『高度成長時代を開く』(共著、図書出版海南、2017年刊)、『大軍の斥候』(青い歴史、2008年刊)などの著書がある。

鄭 安基 (チョン・アンギ)

京都大において日本経済史研究で博士学位を受ける。日本学術振興財団(JSPS)特別研究員、高麗大研究教授を経て、現在、東亜大東アジア研究院特別研究員。東アジアの近現代史を研究している。『満洲、東アジアの融合と空間』(ソミョン出版、2008年刊)と『近代満洲資料の探索』(東北アジア歴史財団、2009年刊)の編纂に加わったほか、『国際経営史』(ハヌルアカデミー、2010年刊)などを翻訳。

李 宇衍 (イ・ウヨン)

成均館大において朝鮮後期以来の山林とその所有権の変遷に対する研究で博士学位を受ける。ハーバード大訪問研究員、九州大客員教授を歴任。現在、落星堡経済研究所研究委員。『韓国の山林所有制度と政策の歴史 1600-1987』(一潮閣、2010年刊)、“Commons, Community in Asia” (Singapore National University Press, 2015、共著)などの論著がある。

李 栄薫 (イ・ヨンフン)

ソウル大において韓国経済史研究で博士学位を受ける。韓神大、成均館大を経てソウル大経済学部教授に就任。定年退職後は、李承晩学堂の校長として活動している。『朝鮮後期社会経済史』(ハンギル社、1988年刊)、『数量経済史で捉え直す朝鮮後期』(共著、ソウル大学校出版部、2004年刊)、『大韓民国の歴史』(キパラン、2013年刊)、『韓国経済史』I・II (一潮閣、2016年刊)などの著書がある。

金 洛年 (キム・ナクニョン)

東京大において日帝下韓国経済史研究で博士学位を受ける。現在、東国大経済学科教授、落星堡経済研究所所長。近代以後の韓国の長期統計を整備する作業と、韓国の経済成長や所得と富の不平等についての研究を行なっている。『韓国の長期統計』I・II (図書出版海南、2018年刊)、『植民地期朝鮮の国民経済計算1910-1945』(東京大学出版会、2008年刊)、『日本帝国主義下の朝鮮経済』(東京大学出版会、2002年刊)などの編著・著書がある。

金 容三 (キム・ヨンサム)

中央大文芸創作学科、慶南大北韓大学院で学を修め、朝鮮日報社の『月刊朝鮮』記者となり、現代史を担当。現在、ペン&マイクの記者、李承晩学堂教師。近現代史研究者として活動している。『朴正熙革命』1・2 (チウ、2019年刊)、『大邱10月暴動、済州4.3事件、麗・順反乱事件』(百年の間、2017年刊)、『李承晩と企業家時代』(プックエンピプル、2013年刊)などの著書がある。